本文章已註冊DOI數位物件識別碼

airiti Library

啄木と中国革命の夢

doi:10.29714/TKJJ.199512.0001

淡江日本論叢, (6), 1995

作者/Author： 林丕雄

頁數/Page： 1-11

出版日期/Publication Date：1995/12

引用本篇文獻時，請提供DOI資訊，並透過DOI永久網址取得最正確的書目資訊。

To cite this Article, please include the DOI name in your reference data.

請使用本篇文獻DOI永久網址進行連結:

To link to this Article:

http://dx.doi.org/10.29714/TKJJ.199512.0001

DOI Enhanced

DOI是數位物件識別碼（Digital Object Identifier, DOI）的簡稱，
是這篇文章在網路上的唯一識別碼，
用於永久連結及引用該篇文章。

若想得知更多DOI使用資訊，

請參考 http://doi.airiti.com

For more information,

Please see: http://doi.airiti.com

請往下捲動至下一頁，開始閱讀本篇文獻

PLEASE SCROLL DOWN FOR ARTICLE

最完整的學術整合查詢平台—華藝線上圖書館 ● http://www.airitilibrary.com ● Find more academic articles on Airiti Library

airiti

啄木と中国革命の夢

淡江大学教授　林丕雄

序　論

啄木は警世家であり予言者でもある。中国との関係について彼が最も強い警告を放ったのが「空中書」である。其中の一段に「両国（清・ロ）共に嘗て一度帝国と兵を交へて敗る。此を以て邦人較(やや)もすれば両国を侮らむとす。浅慮短見、言動何すれぞかの誇大妄想狂者に類する。卑んで又憐むべからずや。帝国は未だ嘗て清露両国に勝たざるなり。敗れたるものは、清国に非ずして北京政府と其軍隊のみ。」と警告をして中国を侮ることを浅慮短見としている。要するに日清戦争に勝って日本が中国を野蛮国(ⓘ)呼ばわりにしたり台湾を日本の植民地(ⓘⓘ)にするなど浅はかな行動であり誇大妄想狂であると日本の国をなじっている。「空中書」は続けて曰く「揚子江畔に伏竜あり。其数を知らず、就中大なるを哥老会と称す。遠く之を望めば脈々たる連山の如し。近いて之を見むとすれども能はず。片鱗時に落ちて剣花官兵を畏れしむるのみ。……ビスマーク嘗て世界の三大怪物を数ふ。虚無党は其一にして哥老会は其二なりき。……漢民族は世界の初めより其郷土に蟠居し、起伏百回、常に他民族の来りて長く漢土に主なるを許さざりき。更に之を現下の状勢に看る。誰か隣邦の為に明日を語り得るものぞ。聞説、哥老会、常に人材を擢て海外に学ばしめ、資金幾億、皆一私人の名を以て世界各所の銀行にあり、兵勇八十余万、訓練欠く所なく、其制度の整頓せる、恰も一大国家の如しと。哥老会孰ぞ然く軽挙に出でむや。時未だ到らざる也。……人よく今の日本を以て古希臘に比す。其説必ずしも所依なきにあらず。然らば乃ち、古羅馬の大業は之を支那の将来に待たむ乎。世界第二十一世紀の劈頭に大呼するもの、夫れ李杜二聖を出せるの民乎。」と論じている。これは岩手日報に明治四十一年十月十三、十四、十六日の三日間にわたって掲載された論文で、啄木と岩手日報とのかかわりは後にスペースを空いて論じて見たいと思うが、実は啄木が警世家・予言者として見られるようになったのも岩手日報に上記の論文が掲載されたからである。

前文を見るに大陸の中原を東西に流れる揚子江畔には哥老会と称する伏竜が数多く潜伏している。この組織は世界三大怪物の一であり、資金、人材においては世界を驚

airiti

かす力を有しており哥老会が存続する限り漢民族は二十一世紀には古羅馬の大業をなすであろうと予言している。日清戦争に敗れた中国はもうすでに国内では政治的に不穏な空気が流れていた。それが哥老会の動きであり二十一世紀に古羅馬の大業をなすのも哥老会の組織と密切にかかわっていたのだろうか。啄木はこれを過大に評価していたのはなぜか、二十一世紀に古羅馬の大業云々は現在世界的に二十一世紀は中国人の世紀であると評価されている現状と的確にマッチしていることを考えれば啄木が予言したことは現代において実現されていると見るべきであり、哥老会の組織を徹底分析して歴史的にそれを実証していきたいと思う。政治的に腐敗した清国を覆えした孫文は又哥老会とはどんな関係にあったのかを論じて行けば啄木の中国洞察力がいかに超能力的であったかを証す要となるだろう。

更に同じく岩手日報に掲載された「百回通信」三に張之洞氏のことについて次のような論説がある。「四日張之洞氏老病を以て遠逝す。……張氏は曩に南清に総督として名を中外に揚げ、李鴻章劉伸一と共に清国官人中の三鼎足と称せられる。後軍機処に入りて西太后の信頼最も厚く、昨年太后皇帝相次いで崩御するや、一身を挺んでて前後の事に処し、挙措神速、何等の擾乱も起るの暇なからしめたるは、内外をして殆んど呆然たりしめし所に御座候。」この文面を読んでもわかるように張之洞氏の死を歎き悲しみ張氏を心から敬愛していたことがわかる。「百回通信」又曰く「張氏の名を初めて邦人に伝へられたるは、日清戦争当時の事に候。時に張氏南清に両広総督たり。戦了るに及び講和条件中台湾分割の事あるを怒り、寧ろ之を英国に与へて其力を借り、以て日本と最後まで戦はんことを主張し候ひき。後翻然として親日主義に転じ、他省に先んじて其部下の武官を留学せしむ。清国武官の日本留学は実にこれを嚆矢とする由に御座候。……然して彼は、清国立憲の前途に関しては、必ずしも尚早論者に非ざりしも、教育と産業の発達を最先にせざるべからずとの意見を固持しゐたる由に御座候。……小生は、日本人の全体が未だ其必要を感ずるに至らざるうちに、安々と苦もなく政治上の自由を与へられたることを以て常々日本人の最大不幸なりと信ずるものに御座候。」と啄木が張之洞を敬愛した理由を述べている。張之洞氏は清国の改革（後に革命）は教育と産業を最優先しなければならない所を指摘し、日本人よりも近代化を渇望した。清国の腐敗した官僚政治を改革するには啄木が「空中書」三で述べたように「清国は二十世紀の原頭に横臥せる旧文明の残骸なり……老耗年久しうして容易に起つ能はざるもの」であり改革ならずんば革命のみであった。啄木は張之洞氏の改革が成功するように祈ったが心の中では中国の革命が起ることを信じ祕かに願っ

airiti

ていたのではなかろうか。

孫文の革命が起る前に啄木は哥老会の組織が中国革命の原動力になることを予知していたのではないか。彼が予言者であることは「古羅馬の大業は之を支那の将来に待たむ乎。世界第二十一世紀の劈頭に大呼するもの、夫れ李杜二聖を出せるの民乎。」と大言して止まなかった所から見ても李白・杜甫の文学を通して理解した啄木の中国文化理解は啄木に中国の未来を予知する能力を与えた。又張之洞氏の死を痛んだ啄木の心境は張之洞氏に改革或は革命による中国の曙を期待していたからであり、啄木の革命的性格から察知するに哥老会や張之洞氏に中国革命を仕掛けるような潜在能力や意識があったように啄木は感じたのであろう。

啄木は中国文化を通して中国革命を予知し、二十一世紀には古羅馬の大業をなすと予言した。それは中国の恐るべき潜勢力に着目し、国の内部に巣くっている哥老会の如き革命的分子の将来性を高く評価し、尊敬に値する日本の明治の詩人であった。

それでは章を追って哥老会と張之洞氏の歴史的評価と啄木の卓識が合致するかどうかを実証してみたいと思う。

註

①福沢諭吉の脱亜論による。

②日清戦争後の下関条約による。

第一章　哥老会と辛亥革命

哥老会は清朝末期の祕密結社であり、乾隆年間に設立された。清朝の太平天国革命に失敗した社会では祕密結社が横行し金銭会、青竜会、八卦会、小刀会、紅会、黄会、白会、天順会、江湖会、哥老会、哥弟会等色々な結社が出現したがいずれも民族主義を基本とした人民の集合体であり、哥老会が後の辛亥革命に協力し「反清復明」のスローガンの下に孫文の中国革命を成功させた。

啄木は「空中書」の中に「哥老会、常に人材を擢(ぬきんで)て海外に学ばしめ、資金幾億、皆一私人の名を以て世界各所の銀行にあり、兵勇八十余万、訓練欠く所なく、其制度の整頓せる、恰も一大国家の如し」と述べているので哥老会の正体に触れ、辛亥革命との関係を歴史的に裏付けして見たいと思う。これが成立すれば啄木は哥老会が「反清復明」の目的を達成し得、未来の中国へ期待をかけていたことが立証されるものと思うからである。

冒頭でも述べたように哥老会は祕密結社で民族主義を高く掲げて「反清復明」を目的としていたがその起源や地点については諸説まちまちである。哥老会は軍隊から始まっている説と軍隊から退役した将兵によって組織されたもの、特に四川省に起源するものであるとの見方が多いが四川省の嘓噜（四川語では哥老の発音に似ている）の組織をまねたというのが適当かも知れない[15]。曽国藩が自己の武力を強めるために湖南軍の中で流行していた異姓間の結集を禁止せず却ってこれらの武力を利用して「兄弟兵」なる組織を結成し自然に湖南軍の中での互助組織となった。それが四川一帯の会党結社をまねて江湖会、哥老会の名称をつけるに至った[16]のである。哥老会が成立してから白蓮教と其他の会党組織の特色を活かして祕密結社となった[17]。しかし其の組織と特徴から見れば福建、広東で結社された天地会とは其の特質を異にし、江湖会、哥老会、哥弟会等四川系統の結社を哥老会系統と見なしている。

哥老会が結成されてから軍隊を基地として迅速に発展蔓延し軍紀をも犯すようになった。後にその勢力が楊子江流域に結集するに至り遂に清朝の憂慮する所となった。一八六七年清朝は哥老会を取締る法令を発し光緒十八年（一八九二）十一月には特別の刑法が設けられ哥老会の支部長や重要な頭目は現行犯として斬首の刑を加える法律が施行された。清朝は哥老会の祕密結社が社会の動乱を起し、社会経済の変遷に従ってその勢力が燎原の態勢をなすに至るのを防止しようと思ったが当時の清朝の腐敗や政治の力ではも早や如何することも出来なくなり哥老会は社会破壊の最も重要な利器となったのである。

清朝晩年に入って中国大陸に存在する各種祕密結社は民族意識の激盪の中で次第に民族革命の潮流を形成した。革命軍はこれら祕密結社の社会破壊力を利用し満族駆逐をスローガンにしたため孫文の率いる革命軍と哥老会との合流が可能になった。この後哥老会及び其他清朝の祕密結社の活動が新しい時代意義をもたらすことになる。

中国革命党成立後孫文は会党（祕密結社）に対して排外運動を排満運動に切り替えるように宣伝教育を行い革命党の指揮に従って行動するように求めた。洪門[18]が真先きに革命軍の管轄に下ったので革命党はこれに力を得た。清朝にすれば会党の取締りや鎮圧に明け暮れ、会党の力を社会的に応用しなかったため動乱が拡大して深刻なる社会問題を惹起した。祕密会党が群衆に入り群衆運動を呼び起して叛乱の途へとスピードを激化させたのは清朝の悲劇であり革命党が漁夫の利を得たことになる。

それでは哥老会が実際に中国の社会で反満活動を行った統計数字を見れば哥老会が革命党にいかに関っていたかがわかると思う。一八六七年以前に起した社会動乱が三

airiti

十九回もあったが哥老会によるものは一件も見られない。詳しい内容は三合会十六回、天地会十五回、洪門二回、三点会一回、不詳五回であったが一八六七年以後の三十五回の動乱中、哥老会が起した動乱が十八回に上り、三合会六回、天地会一回、洪門一回、不詳が九回であった[9]。これを見ても哥老会の勢力がうかがわれる。

日本外務省も明治三十五年五月宮崎滔天、平山周、可児長一の三名を清朝祕密結社の実情調査に派遣[10]しているぐらいであるから哥老会の勢力について日本当局も相当注目をしていたであろうし、啄木もこれに関心を寄せていたのみならず、哥老会のような祕密結社が中国革命党の勢力下に参入して革命を成功させるよう期待していたに違いない。しかし筆者の調べたところでは啄木が「空中書」に書いているように『哥老会、常に人材を擢て海外に学ばしめ、……』というような事実が文献には出て来ないのでこれは張之洞氏が日清戦争後両湖（湖南・湖北）留学生を日本に派遣したことと混同してしまったのではないかと思う。兎に角「空中書」で哥老会のことについて言及していることは啄木が中国の潜勢力に着目し内部に巣くっていた革命的分子の将来性を高く評価した点、予言者啄木の卓識は我々を瞠目せしめる価値があるのではないか。これを第二次世界大戦の結果として見れば、当時蒋介石の率いる中華民国が八年の苦戦を続けた結果日本に敗戦をもたらしたことは啄木が「空中書」内で発した予言の内容と全く一致することを何と説明したらよいであろう。

事実上明治四十四年（一九一一）十月十日中国革命が勃発した。啄木は一九〇五年八月東京に孫文の革命団体「同盟会」が設立され尚且つ明治四十二年（一九〇九）四月十日に革命家孫文が東京へ行っ神田で中国人留学生に対して革命の経過を述べたことを知っていたであろう。それは一九一一年十月革命が起る前から小規模な治安破壊工作が哥老会や其他会党によって行われていたので啄木は彼の革命的性格を発揮して明治四十一年七月十九日の日記に「阿部から日本へ来ている支那の革命家の話をきいて、いっそ支那へ行って破天荒な事をしながら、一人胸で泣いてゐたいなどと考へた」と書いている。当時日本人の中でも宮崎滔天や黒竜会、玄洋社等右翼団体の人が中国革命に関っていたことはよく知られていることで啄木も当然知っていた筈である。彼が「中国へ行きたい」と言っていた目的は右翼団体のそれらの人々とは当然その趣を異にしていたことは「空中書」の中の日本に対する警世家的言論を読んでもよくわかることだ。

啄木は中国祕密結社の哥老会が中国革命に加わって古い中国を打倒するようになることを日本に伝えたかったし、それが成功すれば新しい中国が誕生し日本が今まで取っ

airiti

てきた中国侮蔑の政策は間違っていると警告し、中国革命の成功を期待していたことが以上によってよくわかる。

註

①荘吉発著「清代秘密会党史研究」　288頁　文史哲出版社　民国83年12初版

②劉錚雲著「湘軍与哥老会――試析哥老会的起源問題」　392頁　中央研究院近代史研究所　民国75年12月。

③徐安琨著「哥老会的起源及其発展」　24頁　台湾省立博物館　民国78年4月。

④清朝秘密結社の中で最も規模が大きい組織で哥老会と合流した。

⑤張玉法著「清代的革命団体」　65頁　中央研究院近代史研究所専刊（32）。

⑥児野道子「孫文を繞る日本人」の中では「滔天、平山周及び可児長一は外務省の機密費を得て明治三十年五月、中国の秘密結社の現地調査に出発することになった」と記されている。

第二章　張之洞と辛亥革命

張之洞氏は一八八四年中仏戦争の時に両広総督に任ぜられ戦後中国近代化に力を入れた。その具体的な建設には①水陸師学堂を設立して西洋人教官を招き陸海軍兵法の基礎を作った②香港より人材を招き軍艦四隻の建造に力を入れた。③イギリスより織機を購入して中国紡織工業の基礎を定め④製鉄工場を両広に設け後に両湖（湖南・湖北）に移して製鉄工業の基（もとい）とした。教育面においては広雅書院を設立して近代化教育に努めた。彼が近代化の思想を抱くようになったのは中仏戦争後のことである。中仏戦争において中国は初期の敗戦をなめたが後期には勝利をおさめた。彼はこの時から西洋の武器と戦術を習えば中国はもっと強くなることを察知して自信を得たが、日清戦争において中国軍は戦わずして敗戦を喫したのは日本が明治維新後西洋の科学と政治を導入したからであると認め中国も早く西洋の政治思想を学んで清国の変法を考えない限り永久に世界から隔絶されると思う国民が増えてくることを懸念した。最もこれを強く要求したのが康有為と梁啓超である。張之洞氏は「勧学篇」を発表し皇権の廃止を不可とし、民権は乱政を招くとした。日清戦争後彼は外洋遊学を奨励し科挙の廃止を唱えた①。彼は遊学の目的地を西洋より東洋の日本に移すよう主張して親日的になった。張氏は日本留学を奨励し帰国留学生を優遇する措置をとり官位を授けた。しかし清国留学生の中には革命を主張する学生が多勢いたことで張氏の日本留学奨励策には革命行動や言論を抑制する条例も含まれていた。だがこの条例は彼が総督になっ

airiti

ていた両湖（湖北・湖南）の学生にのみ適用されたので全国的に広がっていたのではなかった。当時の張氏は近代化教育が国の改革をなすと認めていたので日本遊学を奨励し国政に利なからしむるための政策を採ったのである。留学生以外に両湖の新任官吏にも日本遊歴を義務づけて学校、警察、監獄、道路、水利、財政から実業に及ぶまで②全般的に視察させた。啄木が「空中書」に「彼は清国立憲の前途に関しては、必ずしも尚早論者に非ざりしも、教育と産業の発達を最先にせざるべからずとの意見を固持しゐたる由に御座候」と張之洞氏を清国救国の士として尊敬していたのも上記のような親日改革路線を打ち出したことに起因する。

しかし湖北留日学生が後に辛亥革命の中堅分子になって中国革命に莫大な影響を与えた。実は光緒二十九年（一九〇三）四月ロシアが満洲を占領したニュースが東京に伝わるや留学生達は湖北官費留学生陸軍士官学校学生藍天蔚を隊長に推して反ロ義勇隊を結成した。約三千名の留学生が呼応したが湖北留学生の参加者が特に多く、この中には黄興、万声揚、劉成禺、李書城等が含まれていた。これらの留学生集団は同年「昌明公司」を組織し、表では湖北留学生の世話と文化書の買売を目的として掲げていたが祕密裡に革命書を送っていたのであった。これがため湖北では革命書が散布され軍や学界に大きな影響を及ぼした。後に辛亥革命が武昌（湖北）で爆発したのもそういう背景があったからであり張之洞氏が総督を務めた両湖が中国革命の聖地となった。辛亥革命のリーダーとして活躍した人物の中に劉成禺、黄興、宋教仁、藍天蔚、居正が含まれており張之洞氏の日本留学政策によって日本に派遣され或は日本と深く関わっていた人物が多いことを思えば張之洞と辛亥革命とは密切な因果関係にあったことは疑いないことである。

啄木が岩手日報に「百回通信」を寄稿していた明治四十二年（一九〇九）十月、張之洞氏は同月四日北京で逝去した。丁度啄木が「百回通信」を書いていた最中（さなか）の死であった。一九〇三年以後の張之洞氏が育成してきた湖北留日学生の革命への動向を啄木は完全に掌握していたのだろう。そして啄木はその革命が成功すると見ていたのであろう。革命が成功するからこそ「古羅馬の大業を支那に待つ」と予言をしたのである。

註

①周漢光著「張之洞与広雅書院」　260頁　中国文化大学出版　民72.11

②周漢光著「張之洞与広雅書院」　373頁　中国文化大学出版　民72.11

airiti

第三章　啄木と岩手日報

啄木が警世家として文学思想が成熟して行った過程において岩手日報とのかかわりは深い、前述の「空中書」（41年10月13日－16日）を皮切りに「日曜通信」（10月30日－11月１日）「胃弱通信」（42年５月26日－６月２日）及び最後の寄稿となった「百回通信」（10月５日－11月21日）等の時評は日一日として激度を加えて行った。

「空中書」は「洛陽一布衣」の署名で発表しているがこれは啄木自身であることは間違いない(9)。本文の論点も「空中書」の出典を基に展開を試みたもので、日清戦争後の中国問題に啄木の卓越なる国際観が働いていたのである。啄木は中国の風土に深く根ざした文化や文学から中国を理解したのであり(10)、彼の警世家的思想を岩手日報に発表して日本の国民に警鐘を鳴らした。かりに岩手日報というメディアがなかったら啄木の警世思想は腹中で胎死していたのではなかろうか。当時過激と思われがちな啄木の警世的論文を他の新聞や雑誌が載せてくれたであろうか。或は啄木の思想は世に問われなかったであろう。では岩手日報は啄木にとっては何だったのか、なぜ岩手日報のみが啄木の寄稿を受け入れたのか、本章では啄木が岩手日報と深く関って行った経緯といきさつを究明していきたいと思う。

「空中書」一の最後の段に

『先生足下、僕乃ち今日より、秋風独坐の時を割き、日に三滴の酒を瓦硯に磨って、遠く空中の書を足下に致さむとす。足下請ふ之を郷党の為めに読め。天下高楼の人、以て聊か愁緒を慰むることを得ん也。』

という記載があるのを見ても「空中書」は啄木が先生足下と称する「先生」に送ったものであることがわかる。先生とは啄木高等小学校時代の旧師新渡戸仙岳氏のことを言うのであるが斎藤三郎氏の「啄木の旧師新渡戸仙岳氏を訪ふ」と言う一文の中に『「空中書」は啄木が私の為に送ってくれたものです』(11)と答えているところから見ても「空中書」は直接岩手日報に寄稿したものではなく、啄木が当時の混沌とした時局を見るに見かねて判然たる事実を恩師である新渡戸仙岳に対して訊ねたいがためであったのではなかろうか。新渡戸仙岳氏のことを啄木は『日夕盃を啣んで措かず、談書剣の事に及べば、咳唾おのづから鏗爾として玉鳴あり。酔大いに至って初めて憤を時事に発す。論堂々、音吐雷の如く、深夜人鎮って猶四隣を空しうす。云々』と描写した東洋豪傑風の飲士と同一人であったろうかと思われるような人で啄木の敬愛の情が溢れている。彼は明治三十七年から岩手日報社局員として働き、明治四十四年十二月に

airiti

は客員になり、啄木死後の大正二年（一九一三）五月二十七に岩手日報を退社している。⑥

では啄木はなぜ直接岩手日報に寄稿せずに新渡戸仙岳に原稿を送ったのだろうか。新渡戸に送った手紙に次のような内容がある。長文になるが重要な部分を写し取って論じてみようと思う。

「（前略）自分でも実は感心する位切詰めた生活致居候へど、それでも足らず候、（略）以前は困れば借金するを何とも思はぬものに候ひしが、近頃それは出来るだけ罷め居候為、寧ろ滑稽に近き事件毎日の様に家庭内に起り候、されば と言ってまとまった創作などは一定の社の方の務めあれば却々出来申さず、それで色々勘考仕り候ふ上にて思付き候ふは、毎日通信を書いて送ることにして、地方の新聞よりいくらか貰ふ工夫あるまじきかとの一案に御座候。これだけの事ならば毎朝新聞を読んでから一時間か一時間半の時間があれば出来る事故、さして苦痛にもある間敷と存候、報酬は、無論いくらにても生活のたしにさへなればよいといふ程度にて宜敷いのに御座候。

日報にて現在「東京だより」もある事故、如何かとは存じ候へど、先生の御指金にて、小生をお救ひ下され候ふ御積りにて御採用の事叶ふまじく候や、誠に〳〵御申訳なく候へど、万一出来さうの事なら可然御取計ひを仰ぎ度偏へに願上奉り候。」

以上の手紙の内容より察するに啄木は切詰めた生活費の一部分の足しにしようと思って原稿料を〝地方の新聞よりいくらか貰ふ〟工夫をしたのであり、恩師に対して〝先生の御指金にて、御採用〟をお願いしたのであることがわかる。つまり新渡戸仙岳先生が岩手日報の局員になったきっかけを利用して原稿料稼ぎの積りで「空中書」を書いたのだということがわかる。一方新渡戸氏は小児の如き純情を披瀝する啄木を我が子のように敬愛し「百回（原稿が）尽きたら又百回といふやうに致さんかと存居候」という好意を寄せて対応した。新渡戸氏に寄せられた原稿はすべて岩手日報に掲載されたのである。その中には重要な「空中書」「百回通信」などが含まれていた。

啄木と岩手日報の関わりは小笠原迷宮氏が啄木の過去の文学的業蹟を認めて「文芸評論」中に僅かながらも消息を伝える位のものだったが小遣い稼ぎの積りで旧師新渡戸仙岳氏を頼りに岩手日報へのアプローチを試みてそれを成功させ、後に警世家啄木の思想言論の土壌となったことは誠に慶ばしい限りである。かりに新渡戸仙岳氏が岩手日報に奉職していなかったら啄木が直接岩手日報に寄稿をしてもそれが活字になっ

airiti

ていたかどうか疑問である、それで警世家啄木の誕生はそれを世に問わせた岩手日報社局員新渡戸仙岳氏の力によるところが大きいと言わねばならない。啄木と岩手日報の関係は旧師新渡戸仙岳氏の媒介を得て、当時日清、日ロ戦役後の日本の間違った政策を強く批判した。当時の日本政府はみちのくの田舎新聞社の言論を正論と見ず、警世家啄木の思想を一介の無名詩人の戯言として目にもかけなかったことは悔いが残る。啄木の警世思想が重視されていたならば東洋の波瀾は回避されたかも知れないことを思えば前大戦で犠牲になった東洋人の霊が慰められない。

啄木と岩手日報とのかかわりは警世の小論文を掲げた後、啄木の寄稿が杜絶している。それは①朝日新聞の校正係の仕事が見付かったことと②「一握の砂」の出版で忙しくなったからであり明治四十三、四十四年には啄木と岩手日報の関係が薄らいで行く。四十五年四月十六日には啄木に関する最後の記事として啄木の病死を伝えている。岩手日報は新渡戸仙岳の労によって啄木に新思潮の園地を与えて警世家啄木を世に送り出した。

註

①明治四十一年九月十七日日記による。

②林丕雄「福澤諭吉と石川啄木」――脱亜思想からの一考察　日本論叢　第五冊　淡大日文系出版　1993.12.

③斎藤三郎「啄木と故郷人」　110頁　光文社　昭21.11.25.

④岩手日報年表による。

結　論

哥老会と張之洞は中国革命に多大な貢献をした。明治四十一年十月啄木が「空中書」の中で哥老会の組織を揚子江畔の伏竜と称した。又明治四十二年「百回通信」の中で張之洞氏の死を悼んで彼の教育と産業により中国近代化を強く評価し、後に彼が両湖総督の時代に派遣した留日中国人学生が中心となって辛亥革命を起し革命の発進地が湖北の武昌であったことなどから考えて見れば中国革命の志士を育てたのが張之洞氏であったことが伺われる。この二大事実を啄木は明治四十一、二年（一九〇八、一九〇九）の頃から情報を察知し、中国革命（一九一一）が勃発することを予知していた。そしてその革命が必ず成功することを予言し「空中書」内に「世界第二十一世紀の劈頭に中国が古羅馬の大業をなす」と絶叫している。当時の清国の腐敗しきった政治では古羅馬の大業など覚束なく、これを一掃する革命勢力が強くなり、中国再建が成功

airiti

してこそ古羅馬の大業が成るのである。明治四十一年（一九〇八）にそれを予言した啄木は中国革命が哥老会や張之洞の育てた中国人留日学生によって惹起されることを知り、一九一一年の辛亥革命が必ず成功すると確信した。

啄木が言う古羅馬の大業とは孫文革命に続く中国の統一、中華民国時代の蒋介石抗日戦争及び中国の現状を予告していたのであり、二十一世紀が近ずきつつある現時点から見れば啄木の予告は現代人である我々を驚愕せしめるような少しも手抜かりのない完美的な内容である。中国革命の成功がなければ古羅馬の大業はなし得られない。啄木は明治四十一年には完全に警世家から予言者へと脱皮したと言っても過言ではなかろう。辛亥革命が起った一九一一年十月十日啄木はもうこの世にはいなかった。

最も重要なことは啄木が新渡戸仙岳を頼って小遣い稼ぎの積りで寄稿した重要な論文が全部新渡戸氏の慧眼によって岩手日報に掲載されたことである。当時の岩手日報はみちのくの田舎新聞社であったが勇敢にも日清・日ロ両戦役後の思想の統一が厳しくなりつつあった日本に於いて啄木の警世的論文を活字にして世に問わせたことは明治日本の一大事であったと言わねばならない。岩手日報がこれらの記事を掲載しなかったら警世家啄木、或は予言者啄木の誕生はなかったと断言できる。彼の予言は或は世に問われないまま胎死の憂き目を味わったかも知れないことを思えば岩手日報の役割は天より高いほどの価値感で評価されねばならない。中国革命の成功を予言しその後に中国が古羅馬の大業をなすと大言を吐いた啄木の国際観は明治日本では重要視されない不遇の身で終ったが、国際化時代が進む中で啄木研究はこれからもっと視界を広げて推し進められなくてはならない。